

Schütziana

The Gymnocalycium Online Journal



Volume 14, Issue 1, 2023
ISSN 2191-3099

This journal was published on April 1st, 2023

目次(Contents)

Papsch, Wolfgang	編集者より(A. V. Frič の紹介)	pp. 2-6
Schädlich, Volker	<i>Gymnocalycium marsoneri</i> Frič ex Y. Itô, <i>Gymnocalycium megatae</i> Y. Itô, <i>Gymnocalycium matoense</i> Buining & Brederoo –すべて一つの種 ? 第1部: <i>Gymnocalycium marsoneri</i>	pp. 7-20

発行日 : 2023 年 4 月 1 日

法的通知

出版者: WORKING GROUP SCHÜTZIANA, Mario Wick, Am Schwedderberg 15, 06485 Gernrode, Germany

編集チームと内容に責任: <https://www.schuetziana.org/index.php/contact-us>

SCHÜTZIANAはワーキンググループSCHÜTZIANAの雑誌です。

供給源: SCHÜTZIANAは、ワールド・ワイド・ウェブを介してのみPDFファイルとして利用可能で、次のサイトからダウンロードできます。: <https://www.schuetziana.org/index.php/downloads>

それぞれの記事の内容は執筆者の意見を表現し、ワーキンググループSCHÜTZIANAの意見と一致している必要はありません。

SCHÜTZIANAの刊行物は無料で、自由に配布することができます。内容およびSCHÜTZIANAの記事の写真は著作者の財産であり、許可なく、印刷や保存を読む以外の目的に使用することはできません。

© 2023 WORKING GROUP SCHÜTZIANA. 著作権所有

ISSN 2191-3099

表紙写真: *Gymnocalycium marsoneri* VoS 1393、Frias の西、Catamarca 州、標高 368 m (写真: V. Schädlich)

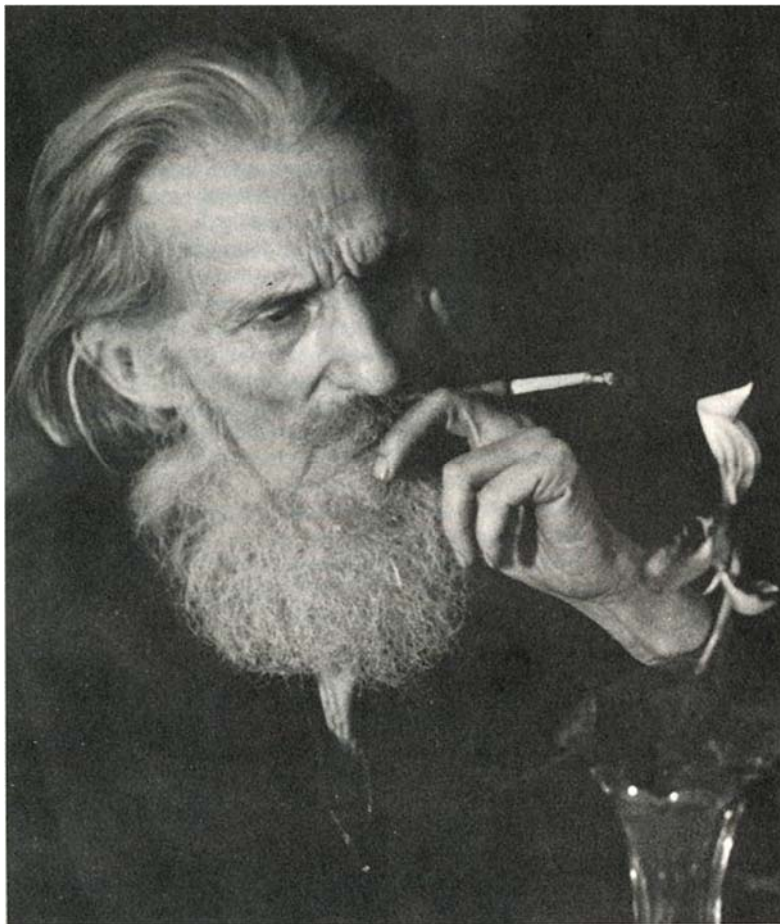
Editorial(解説)

親愛なるギムノカリキウム愛好者へ

Wolfgang Papsch



A.V. Frič という名前は、特にラテンアメリカのサボテンの産地データや命名法に関する議論に関連して、私たちの雑誌の記事に定期的に登場する。これは当面の問題にも当てはまる。したがって、SCHÜTZIANA で「サボテンハンター(cacti hunter)」Frič を紹介することは特に興味深いかもしれない。



Alberto Vojtěch Frič 1942 年、写真は Lovec kaktusů からの複製

Vojtěch Frič jr. (ジュニア)は 1882 年 9 月 8 日にプラハで生まれた。父 Vojtěch sr. (シニア)はプラハで市議会議員と副市長であった。家族は上流階級と見なすことができ、政治、商人、動物学者の家族がさらにいた。おそらく、多様な方法で社会的に関与する家族の中での成長は、彼の形成的な背景であった。少年 Vojtěch は、自然とそれに関連する科学に非常に興味を持っていた。彼がサボテンに興味を持ち始めたのは、幾分ぎこちないものであった。引き金となったのは、家に持ち帰られた *Echinopsis eyriesii*(和名:短毛丸)と、警官が彼を窃盗で告発したことであった。少年の好奇心は開花

したサボテンから生まれた。後に彼はこのエピソードについて次のように書いている、「私により復讐の道具になることだけが意図されていた、サボテンのような面白みのない形のない植物が非常に多くの美を産み出し得た事は、私にはとても面白かった。」、15歳という若さで、彼はサボテンの専門家と見なされ、サボテンに関する質問についてアドバイスを求められ、科学会議に招待されることもあった。

1899年の冬に彼の最初のサボテンコレクションの凍結が、一つの挫折であった。コレクション再建後、当時19歳だった彼は、ラテンアメリカのサボテンの国への旅に出ることを決心した。サボテンの収集とは別に、彼は文明の影響をほとんど受けていない、ほとんど知られていないインディアンの部族に興味を持っていた。



A. V. Frič (Brazil, ~ 1905-1907) <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=38491637>

1901年5月15日、彼は旅行のために Mato Grosso の境界にある Sao Paulo へ出発した。フィールドへの遠征中に、彼はサバンテス族 (Savantes tribe) のインディアンに出くわした。彼は1年以上 Mato Grosso 地域で調査を行っていた。ジャガーの襲撃で重傷を負い、数週間にわたりインディアンの看護を受けなければならなかった。この「虎」の抱擁の生き残りに対して、彼はインディアンの最高の敬意で報われた、これにより、彼は他の方法ではほとんどアクセスできない目的地に到達することができた。1902年8月5日、彼はこの旅から彼のクリスチャン名をスペイン語に翻訳してつまり、「Alberto」にしてプラハに戻った。

わずか 1 年後の 1903 年 8 月 11 日、彼は再び南米への別の旅に出た、今度はウルグアイとパラグアイである。政府の委託により、Frič は初めて Pilcomayo 川の全流域を調査した。そうすることで、彼はしばらくの間、パラグアイ川沿いに住むチャマココ族 (Chamacoco tribe) と暮らした。彼は部族の女性、Lora-y を結婚した妻として連れて行った。この絆に由来する Hermina という娘がいる。この航海は 2 年以上続き、その間に、数あるサボテンの中で、*Echinocactus Fričii*、*E. arechavaletai*、*E. floricomus* 及び *E. scopa* を発見した。しかし、*Gymnocalycium* コミュニティにとって、それは重要な *Gymnocalycium mihanovichii* の最初の発見である。旅は 1905 年 9 月 17 日に終了した。

1906 年 8 月 21 日に始まり、1908 年 8 月まで続いた 3 度目の旅では、再びアルゼンチン、パラグアイ、ブラジルの一部を訪れた。彼を動機付けたのは、再び民族植物学的な理由である。原因不明の病気にかかったチャマココ族長 (Chamacoco chief's) の息子をヨーロッパに連れて帰った。Frič は母国での治療を望んだ。この旅行中、Frič は Buenos Aires 大学に招かれ、講演を行った。



Left: A. V. Frič 1901 – <http://www.radio.cz/cz/static/alberto-Vojtěch-Frič>

Right: A. V. Frič 1920 – 著作権フリー, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=38477322>.

1909 年、3 年間にわたる 4 回目の旅で、Frič は少年を薬とともに連れて帰った。再び、アルゼンチンとパラグアイが彼の目的地である。このツアーでサボテンに言及した報告は無い。

Frič は 1919 年 5 月 28 日から 1920 年 6 月 11 日まで 5 回目の航海に出た。科学者および旅行作家としてだけでなく、新しく設立されたチェコスロバキア共和国の外交官として、Frič に大使を任命することが意図されていたが、この計画は政治的意見の相違により実行でき無かった。そのため、サボテンを検索が今回の旅の焦点だった。Frič はウルグアイから多くのサボテンを輸入した。それらは、たとえば、ベルギーの De Laet 社やチェコスロバキアの Seidl 社に送られた。

1916年から1920年にかけて、サボテン全般に関する数多くの記事が「*Monatszeitschrift für Kakteenkunde*」(サボテン研究の月刊誌)やチェコのさまざまな雑誌に掲載された。その上、Draga Janáčkováとの結婚もこの時期に行われた。家族の両方の枝、インディアンとヨーロッパの枝は、2人のチェコのドキュメンタリー映画製作者の旅行により偶然に出会った。彼らは Frič の歴史についての手がかりを探していたところ、彼の娘 Hermina に出くわした。彼女の 8 人の子供も、誇らしげに Frič という名前を持っている。

Frič は 1923 年 4 月 12 日に 6 回目の遠征に出発し、1924 年 2 月 25 日に帰国した。彼の旅行リストには、メキシコとそのサボテンが含まれていた。圧巻だったのは、絶滅したとされ、植物園で植物学者の目に触れるところに奇妙に生えていた *Astrophytum asterias* (兜丸)を回収したことである。

ギムノカリキウム愛好家にとって、1927 年 1 月から 6 月までの彼の 7 回目の旅行は特に興味深い。この 6 ヶ月の間(7ヶ月は計算間違いと思う)に、Frič は Patagonia と Asuncion の間で多くの新しいサボテンを発見した。「*Möllers Deutsche Gartenzeitschrift*」(Möller's German Garden Magazine)では、「The Cacti Hunter」というタイトルで旅の印象を鮮やかに描いている。

1928 年 10 月から 1929 年 3 月までの 8 回目で最後の旅の目的地は、再びアルゼンチンとウルグアイであった。彼はボリビアとペルーにも寄り道したかも知れない。この旅は、Volker Schädlich による以下の寄稿で言及されている。

1928 年、Frič は「*Cacti the coming fashion*(サボテン・将来の流行)」というタイトルの最初の植物と種子のカタログを出版した。1 年後には「*Cacti Hunter*(サボテン探究者)」というカタログが発行され、1932 年には「*Cacti Hunter at Home*(家でサボテン探究者)」というカタログが発行された。三つのカタログは全て、Frič の発見物に関する重要な情報源である。

時が経つにつれて、主に彼の航海により、Frič は世界的に有名なサボテンの専門家に成長した。彼は数十の種を学術記載し、当時知られていたサボテンの最も完全なコレクションの一つを作り上げた。専門家は彼の植物の発見に感銘を受け、彼は今日までチェコスロバキアで高く評価されている。プラハでの彼のコレクションには、30,000 を超える標本が含まれていた。しかし、彼の最初のコレクションと同様、これも第二次世界大戦中に凍結により破壊された。

サボテンの分野での彼の発見は決定的な意味を持っている。残念ながら、彼は自分の発見を科学的な方法で発表することに興味がなく、厳密な分類規則に慣れることも出来なかった。ラテン語の判別文、学術記載、および発見データの欠落により、彼の発見物の大半に対しては *nomina nuda* (裸名)になる。それでも、プラハ国立博物館に寄託されている彼の植物標本は、100 を超える標本で構成されているため、科学的に重要である。

Frič は母国で有名なサボテンの専門家であるだけでなく、チェコスロバキア以外でも民族誌学的活動とアメリカ先住民に関する知識で知られている。多くの写真とは別に、彼は旅行から多くの民族誌学的工芸品を持ち帰った。旅の後、Frič はサボテンの栽培とエキゾチックな植物の交配に専念した。彼は特にトマトで成功を収めた。

Frič は数十の先住民族を訪問し、36 のインディアン言語の辞書を編集した。彼は、彼自身の言葉によると、10 年以上インディアンの中で過ごしたが、彼自身の言葉を借りれば、人生最高の時間であった。彼は数多くの写真を撮り、数え切れないほどの民族誌学的工芸品やお土産を

ヨーロッパへ持ち帰った。これらのコレクションの大半は例えばニューヨークやサンクトペテルブルク(Saint Petersburg)など、海外に持ち出された。プラハ(Prague)に残ったのはごく一部だった。



チェコスロバキア郵便の切手にある A. V. Frič

Alberto Vojtěch Frič は、植物学や民俗学に関する多数の出版物に加え、若者向けの専門書や文学も執筆した。そのため、彼はチェコスロバキアで非常に人気があり、これらの本の新版が何度も何度も印刷された。それらは Zdeněk Burian によって挿絵が描かれた、そのようにして彼は Frič が記述した冒険に命を吹き込んだ。

1944 年 11 月、Frič はガーデニング中に負傷した。彼は 1944 年 12 月 4 日に破傷風にかかり、この病気で亡くなった。

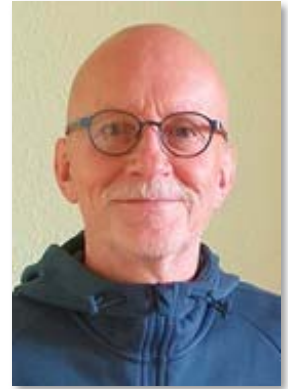
参考文献 (Literature)

Crkal, K. 1983: Lovec Kaktusů.-Academia-Prag.

Zázvorka, J.& Šedivý, V. 1993: Jména Kaktusů A. V. Friče.-aztekia 1991 (14).

我々は、英語への翻訳でサポートしてくれている、Iris Blanz 女史(オーストリア)に、ロシア語への翻訳では、Larisa Zaitseva 女史(ロシア)とロシア語版の内容修正について Victor Gapon 氏(ロシア)に、日本語への翻訳では、Takashi Shimada 氏(日本)に、中国語への翻訳では、Jiahui Lin 氏(中国)に、チェコ語への翻訳では、Václav Johanna 氏(チェコ共和国)に、そしてまた我々の出版物のミラーサイト(<https://www.cactuspro.com/biblio/>)の Daniel Schweich 氏(フランス)に、心から感謝の意を表したいと思います。

***Gymnocalycium marsoneri* Frič ex Y. Itô, *Gymnocalycium megatae* Y. Itô, *Gymnocalycium matoense* Buining & Brederoo – すべて一つの種？**



第 1 部 : *Gymnocalycium marsoneri*

Volker Schädlich

Bergstraße 1, 03130 Spremberg (Germany)

E-mail: volker@gymnos.de

概要 (ABSTRACT)

本シリーズの第1部は、*Gymnocalycium marsoneri* Frič ex Y. Itôを紹介する。短い歴史的概要が与えられ、種の地理的分布が議論される。種子に基づき、*Gymnocalycium marsoneri*と*Gymnocalycium delaetii* (K. Schum.) Hosseusの違いが指摘される。また、*G. marsoneri*の記述を修正した。

キーワード (KEYWORDS)

Cactaceae, *Gymnocalycium*, *delaetii*, *marsoneri*, *megatae*, *matoense*, *schickendantzii*, アルゼンチン(Argentina), ボリビア(Bolivia), パラグアイ (Paraguay), ブラジル(Brasilia)

序論 (INTRODUCTION)

チェコのAlberto Vojtěch Frič (1882年9月8日-1944年12月4日) は民族学者、サボテンや植物の収集家、そして貿易商であった。新大陸への遠征は全部で8回に及んだ。1回の航海でアメリカ南部とメキシコ、さらに7回の航海でアルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイの中南米を巡った。彼は8年近くにわたり、当時まだ知られていなかった多くの地域を探検し、同時にサボテンを探した。1928年10月、最後の旅は、まずウルグアイへ、そして同年末にはアルゼンチンへ向かった。この旅では、アルゼンチンの最北部、Salta州まで足を延ばした。特にエキノプシス(Echinopsis)を求めてアンデス地方を訪れた。1929年、Fričは「Möllers Deutsche Gärtner-Zeitung」(メラーのドイツ園芸雑誌) に「Die letzte Kakteenjagd des Forschers A.V. Frič」(探検家A.V. Fričの最後のサボテン狩り) という見出しで、その事について報告している。

1935年、*G. marsoneri*はFričによってKreuzingerのカタログに初めて記載され、簡単に記述されて次のように書かれている。「*Marsoneri* Frič 1934. *Knebelii* に似ているが、側刺は7本。横方向に3本ずつの2グループ、下方向に1本。」 Fričは1933年の時点で、この植物の記述を計画していたことがうかがえる。(fig. 1)



Nr. 211—253.

- 214 *denudatum* hybr. hort.
- 212 *hypticanthum* (Lem. 1838) Br. & R. 1922
- 213 *megalothelium* (Sencke 1898) Br. & R. 1922
- 214 *uruguayense* fl. rosea Frič 1928
- 215 *Gürkeanus* (Heese 1911) Br. & R. 1922
- 216 *hypticanthum ciliflorum* Frič 1929
- 217 *Leeanum* (Hook. 1844) Br. & R. 1922
- 218 *Netrelanium* (Morw. 1853) Br. & R. 1922
- 219 *uruguayense* (Arech. 1905) Br. & R. 1922
- 220 *nidulans* Frič 1929
- 221 *occulum* Frič 1929
- 222 *platense* (Speg. 1896) Br. & R. 1922 (?)
- 223 *Quehlianum* (Hoge, jr. 1899)
- 223 a) *Quehlianum caespitosum* var. nov.
- 224 *riojense* Frič 1929
- 4) *Microsemineae*: hohe Cordilleren. (Leitart: *G. Saglione*)
- 224 a) *brachyanthum* (Gürke 1907) Br. & R. 1922
- 225 *curvispinum* (Gürke, Iconographie) syn: *nigrarietolium* Bckbg.
- 226 *curvispinum f. cristata*
- 227 *curvispinum* Portezuelo
- 228 *horizontalium* Frič 1929
- 229 *Kurtzianum* (Gürke 1906) Br. & R. 1922
- 230 *Monvillei* (Lem. 1838) Pfeiff. 1845
- 231 *Moslii* (Gürke 1906) Br. & R. 1918
- 231 a) *Moslii f. cristata*
- 232 *Moslii centrispina*
- 233 *Pilanzii* (Vauq. 1923)
- 234 *Saglione* (Cels 1845) Br. & R. 1922
- 235 *Sigelianum* (Schick 1923) (?)
- 236 *Sulterianum* (Schick 1927) (?)
- 5) *Muscosemineae*: Cordilleren-vorgebirge, Chaco, Paraguay. (Leitart: *G. Schickendantzii*)
- 237 *Anisitsii* (K. Sch. 1903)
- 238 *Damsii* (K. Sch. 1903) Br. & R. 1922
- 239 *De Laetii* (K. Sch. 1901)
- 240 *Knebellii* Frič 1926
- 241 *Marsoneri* Frič 1934
- Habitus wie bei *Knebellii*, jedoch ? Randachel: je 3 nach dem Seiten, einer nach unten
- 242 *Michoga* Frič 1926
- Wurz. um die Axtelie denkmal punktiert
- 243 *Mihanowichii* (Frič et Gürke 1905) Br. & R. 1922
- 244 *Mihanowichii stenogonum* Frič 1926
- 245 *Schickendantzii* (Web. 1896) Br. & R. 1922
- 246 *Stuckertii* (Speg. 1905) Br. & R. 1922
- HARRISIA** Britton 1908 (Cereus)
- Nicht sehr einblühige, vorerst noch behaltene Gattung, deren Ausblühung teilweise zu den kriechenden *Gymnopericarpae* und dem folgenden Unterfamilien überleitet. Blütenzeit einseitig Früchte unregelmäßig aufsteigend. Drei Arten von Früchten:
- 1. kahl mit papierartigen Schuppen
- 2. mit kleinen Schuppen und Filzhaaren
- 3. mit entwicklungten Stacheln
- 247 *Bonplandii* (Palm. 1837) Br. & R. 1920
- 248 *eriphora* (Pfeiff. 1837) Britton 1908
- 249 *Jusberlii* (Reb. 1898) Kreuzgr.
- 250 *Martii* (Lab. 1854) Br. & R. 1920
- 251 *pomanensis* (Web. 1897) Br. & R. 1920
- 252 *Regelii*
- 253 *toriuosa* (Forb. 1838) Br. & R. 1920
- Übergang zu den *Trichopericarpae*. **JASMINOCEREUS** Br. & R. 1920 (Cereus galapagensis Web. 1899)
- Übergangsgattungen, teils zu den *Trichopericarpae*, teils zu den *Echnopericarpae*: **NEOABBOTTIA** Br. & R. 1921 (Cereus paniculatus P.D.C. 1828) mit *Cephalum*malge
- WILMATTEA** Br. & R. 1909 (Cereus minutiflorus Vauq. 1913)



Nr. 218: *Gymn. Netrelanium* (Hook.) mit grünelgelben Blüten, die bereits an zweijährigen Sämlingen erscheinen.



Nr. 235: *Gymnocalycium Sigelianum* (Schick) große hellrosa Blüten mit rotem Schlund.

Fig. 1: 1935年、K. Kreuzinger 著「サボテン系統図の改訂を伴うアメリカその他の多肉植物の登録」に *G. marsoneri* の解説がある。Frič 発見したサボテンの大部分は、ICBN (国際植物命名規約) の規則を拒否したため、名前を付けたにもかかわらず、無効な記述が残っていた。1935年1月1日以降、植物の新規記載にはラテン語の鑑定を付けることが義務付けられている。従って、Fričの *G. marsoneri* の記載は無効である。

1937年、PotsdamのRobert Blossfeldは、彼の春のカタログ (K 370) のノベルティとして *G. marsoneri* の種子を初めて提供した。この提供は秋のカタログ (K 380) でも繰り返された。種子や植物は、Harry Blossfeldが収集旅行のときに集めたものである。彼は1935年、Oreste Marsonerと共にこの旅に出た。機会があれば、彼はPotsdamの父Robert Blossfeldに植物と種子を送った。

Harry Blossfeldは、1936年に2トントラックで行った旅の様子を雑誌「Kakteenkunde」の連載で報告している。彼らはTucumán州やSalta州などを旅した。Fričは1929年に同じ地域を旅している。この種子はおそらく、Harry Blossfeld、またはガーデンセンターのRobert Blossfeldのいずれかを經由して直接、日本の伊藤芳夫 (Y. Itô) に届いたと思われる。Blossfeld社の種子は世界中で販売された。これは、顧客の手紙が引用されている、1937年11月のカタログの裏ページに記載されている。

1957年、*G. marsoneri* の正式な最初の記載は、伊藤芳夫の著書「サボテン図説 (Explanatory Diagram of Austroechinocactinae)」で、ラテン語による診断と植物の図を添えて確立された。Kreuzinger が以前行ったように、彼は *G. marsoneri* Frič nom. nud. に言及した。そして、新種を *G. schickendantzii* Britton & Rose、*G. De Laetii* Y. Itô、*G. michoga* Y. Itô、および *G. stuckertii* Britton & Roseと共に彼の亜属 4 *Ophiocephalum* に割り当てた。(fig. 2)

形態 ボーグ教授は本種を、波光竜の変種としているほどよく似ているが、以下なるべく相違の点を挙げて見よう。

より扁円状に育つ、稜は 10—15 で、よりとがった瘤にくずれている。刺は扁平がかつた突進状で、より多く、約 8 本で、やや歯状に出ている。新刺は基部灰色の黒褐色であるが、後には灰褐色(先端黒色)化する。

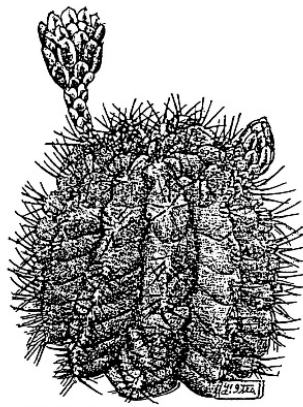
花 花はより長く(約 6cm)、色はより濃色で、しかも濃色の中筋がある。

(3) 蛇斑龍 (15) *Gymnocalycium michoga* Y. Ito, nov. sp. (*Gymnocalycium michoga* Frič, nom. nud. 1926.)

形態 一部においては波光竜の変種ともいわれているように、よく似ているが、以下なるべく相違の点を挙げて見よう。

体色はより黒色がかつている。瘤はより高く、

鋭い。刺座の周囲には、体色より濃色の斑点が無数に入っている。



第 179 図 蛇斑龍 (*Gymnocalycium michoga* Y. Ito.)

刺は後方へあまり彎曲していない。

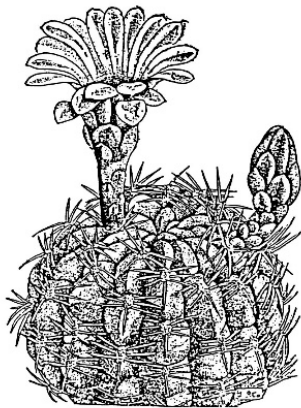
花 長さ 3—5 cm、径 3—4 cm。内瓣は白色で、さくらねずみ色の中筋が入っている。外瓣は緑色がかつた淡さくらねずみ色。花糸は白色。花柱は淡黄緑色。柱頭は淡黄色。花筒は濃青緑色で傑出し、わずかに鱗片を有す。(第 179 図参照)

自生地 北部アルゼンチン。

(4) 綾鼓 (15) *Gymnocalycium Marsoneri* Y. Ito, nov. sp. (*Gymnocalycium Marsoneri* Frič, nom. nud. 1934.)

形態 波光竜にやや似ているが、以下なるべく相違の点を挙げて見よう。

普通単管で、扁円状で、体色は濃緑色、乃至は黒緑色。稜は 15—20 で、あご状突起か、瘤状にくずれている。刺は針状で、外刺のみで約 7 本備え、長さ 2—3 cm。新刺は基部淡暗緑色で、中程から先端にかけて淡紫褐色にぼかされているが、



第 180 図 綾鼓 (*Gymnocalycium Marsoneri* Y. Ito.)

Simplex, globosa; griseo-viridis apice pallida saepe vix albo-fusco-purpurea; costis ad. 11. acutangularibus in tuberculis acutis magnimammillaribus; areolis oblongis ca. 1.5 cm inter se remotis, mirabilis nigro-viridis punctatis tuberculatis; aculeis aculeatis marginalibus ca. 7, ad. 2 cm longis primum atro-fuscis postea albo-nigris; flore campanulato-infundibuliformi 3—5 cm longa 3—4 cm lata, petalis interioribus albis, albo-rufo-viridis stiat, exterioribus albo-atro-viridis; tubo tubiformi longo, nudo, saturato-viridis-Argentina.

—An *Gymnocalycium michoga* Frič, nomen nudum, 1926.

(77) *Gymnocalycium Marsoneri* Y. Ito, nov. sp. (ante. p. 175.)

Simplex, applanato-globosa; griseo-viridis vel opaco-viridis; costis ca. 15, subrotundatis humilibus in tuberculis magnimammillaribus; areolis oblongis albo-fuscis tomentosus; aculeis marginalibus ca. 7, 2—3 cm longis, primum basi albo-fuscis apice brunneis postea obscurioribus; flore campanulato-infundibuliformi 3—3.5 cm longa 3—4.5 cm lata, opaco-albo-lutea vel opaco-alba-Argentina.

—An *Gymnocalycium Marsoneri* Frič, nomen nudum, 1934.

(78) *Gymnocalycium uruguayense* var. *roseiflorum* Y. Ito, n.v. (ante. p. 198.)

Parvum, applanato-globosum vertice depressum; atro-viridi; costis ca. 12, rotundatis in tuberculis valdis humilibus magnimammillaribus; aculeis marginalibus ca. 7, effusis, intertextus, subadnatis, primum albo-atro-luteis postea opaco-fuscis; flore infundibuliformi 4—4.5 cm longa 6—7 cm lata, rosea vel albo-rosea. —Uruguay.

—An *Gymnocalycium uruguayense* var. *rosea* Frič, nomen nudum, 1928.

(79) *Gymnocalycium Leeanum* var. *roseiflorum* Y. Ito, n.v. (ante. p. 199.)

Applanato-globosum, 2.5—3 cm crassum; nitido saturatoviride; costis ca. 13, in tuberculis magnimammillaribus; aculeis flaccidis marginalibus ca. 7, effusis, complexis, primum albo-luteis deinde sordidis; flore rotata albo-rosea.

(80) *Neoporteria densispina* Y. Ito, nov. sp. (ante. p. 213.)

Simplex, globosa vel subcylindrica 8—12 cm lata 5—8 cm alta; opaco-viridis, saepe atro-purpurea; costis 15—18, in tuberculis acutatis mammillaribus; aculeis plurimis (70—80) tentaculato-elasticis intertextus, marginalibus 60—70, tenuibus 2.5—3 cm longis, centralibus ca. 10, validioribus atque longioribus 3.5—4 cm longis atro-albis vel brunneis; flore angustotubo infundibuliformi ad. 3 cm longo et lato albo-roseo vel lilacino; tubo et ovario albo-luteo-viridis, nudisculis vix albis lanatis (setosis fere nullis); fructu fusiformi. —Chile.

—An *Chilena densispina* Bckbg, nomen nudum, 1937.

(81) *Sericocactus* Y. Ito, n.g. (ante. p. 223.)

Simplex, depresso-globosa; costis in tuberculis humilibus microthelis divisis; aculeis tenuissimis, albis, sericatis elasticis, primum luteis deinde albescentibus; flore angusto tubo infundibuliformi ca. 2 cm longo ca. 2.5 cm lato aurantiaco; stylis

Fig. 2: 1957年、日本の伊藤芳夫 (Y. Itô) による *G. marsoneri* の有効な記述。

翻訳された記述文は以下の通りである。：「胴体は単幹、平坦な球形、灰色がかつた緑色または艶消しの緑色。； 稜は約 15 本、低くてやや丸みを帯び、瘤状の隆起に分かれる。； 縁刺は 7 本、長さ 2—3cm、最初は基部が薄茶色で、上部は茶色、後に濃くなる。； 刺座は楕円形、薄茶色の綿毛が付く。花は漏斗-釣鐘形状で長さ 3—3.5cm、幅 3—4.5cm、艶消しの淡黄色または艶消しの白色。アルゼンチン。」

H. Till, H. Amerhauser, W. Till らの著者は、オーストリアのサボテン雑誌「*Gymnocalycium*」(2008 年 11 月特別版)に「*Gymnocalycium* 属の再編成第 II 部」というタイトルの記事を掲載している。*Gymnocalycium* 属内のいくつかの命名法の変更は、この記事で行われた。*G. marsoneri* は亜種として *G. delaetii* (K. Schum.) Hosseus に割り当てられた。著者らは、新しい組み合わせについて説明していない。

4 年後、*G. delaetii* の新しい記述が「*Gymnocalycium*」(2012 年、25(3))に、タイトル(翻訳)「アルゼンチン、ボリビア、パラグアイのグランチャコ(Gran Chaco)とサバンナ(Savannahs)産ギムノカリキウム種 第 XI 部」で掲載されている。著者の H. Till と H. Amerhauser は、「生息地の観察と栽培の長期調査により」、*G. marsoneri* と *G. delaetii* の調査された分布域で両方の分類群の特徴に気付くことができると書いている。彼らは、*G. marsoneri* を *G. delaetii* の亜種として再編成した。

分布域(Distribution)

1936年にMarsonerとBlossfeldが発見した後、Rauschが再発見するまで、*G. marsoneri*の植物はヨーロッパに到達しなかったと思われる。Fričもこの地域で採集したようである。当時、アルゼンチンは優れた鉄道網を持っていた。(fig. 3) 当時、Buenos AiresからSaltaまで電車で移動することはまだ可能であった。Fričはこの旅でも、いつものように電車を頻繁に利用した。



Fig. 3: Campo Quijano の郊外、鉄道駅周辺。ここはおそらく、*G. marsoneri* の最も有名な産地である。最初のコレクションは、この地域から再びヨーロッパに到達した。(1964年にWalter Rausch WRA 159; 1978年にBrigitteとJörg Piltz P 230)

ここ数年、集中的なフィールドワークを通じ、*G. marsoneri*のいくつかの新しい産地が発見された。したがって、Saltaの町の南(Salta州)、Trancasの南(Tucumán州)のこれまで知られている地域に、より南と東に位置するさらなる地域が追加された。Chaco州、Santiago del Estero州、Catamarca州の産地では、分布域が大幅に拡大した。その結果、筆者の知る限り、南北に約500kmの直線距離の拡大が見られる。(fig. 4) Chaco州に限れば、東方向への拡大もかなり大きく、Campo Quijanoから、発生が確認されている「Loro Hablador州立公園」までの直線距離は約370kmある。

著者が知っている産地は、標高220～1500mに位置している。発見されたすべての地域は、アルゼンチン、ボリビア、パラグアイ、およびブラジル領土の一部にまたがる乾生林であるChacoにある。

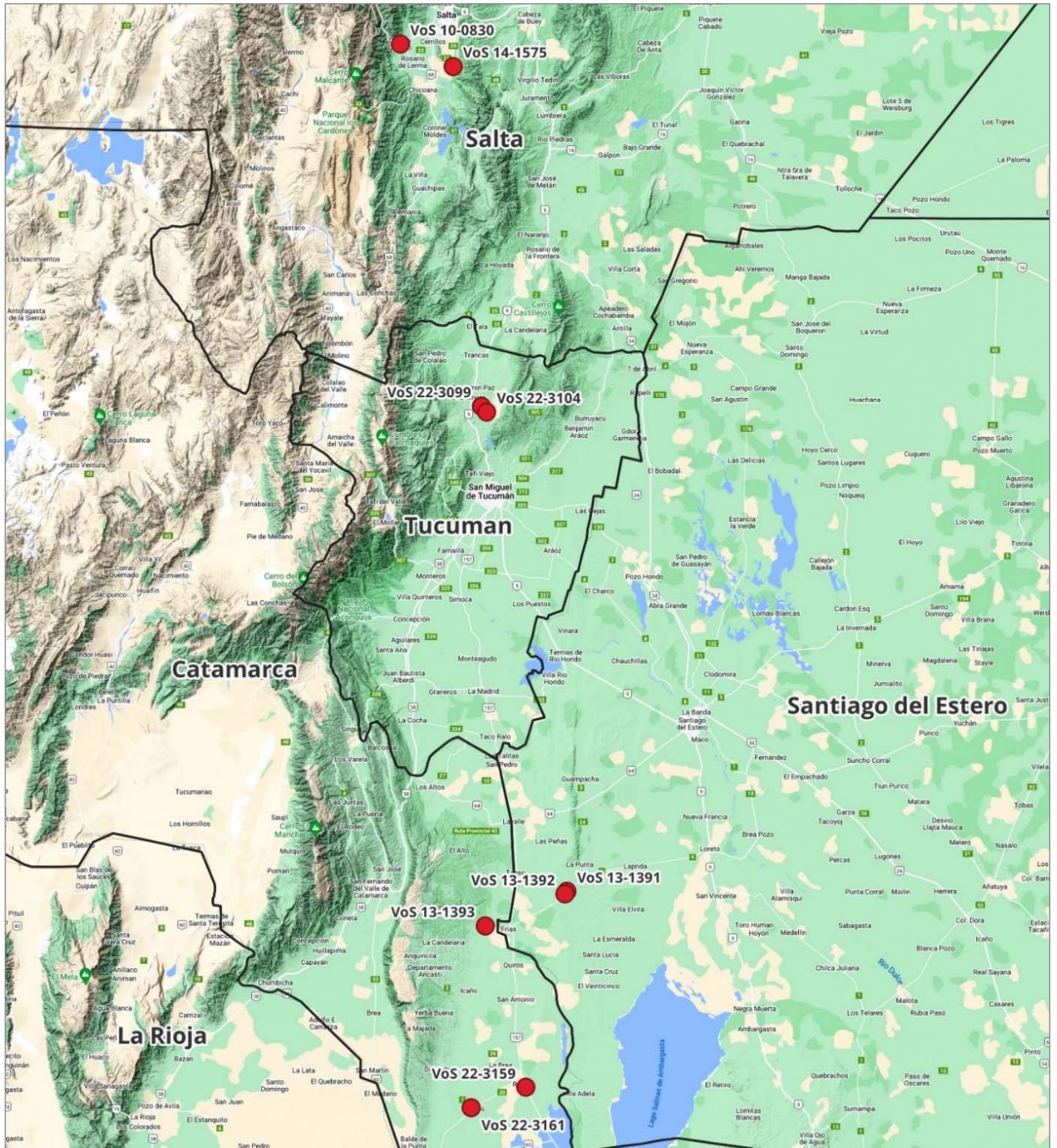


Fig. 4: *G. marsoneri* の既知の産地 (地図: M. Wick, 地図の背景 Google Maps)

Muscosemineum 亜属の他の種の場合と同様に、分布域は一方では点状であるが、他方では全体で比較的広い地理的領域にまたがっている。赤いジューシーな果実は、鳥や他の野生生物によって分配される。種子は発芽能力を長期間維持するため、気候条件が悪くても発芽に問題はない。*Muscosemineum* 亜属のいくつかの種子は、*G. marsoneri* のものを含め、遺伝的に決定された発芽の遅延を示す。収穫直後に播種すると、失敗する可能性が高くなる。種子は栽培で何年も発芽することができる。個々の産地間には大きな隔たりがあり、部分的に多様な生態学的条件を持つが、分布域の北からの個体群と南からの個体群の間には顕著な形態学的差異は無い。

生息地(Habitats)

筆者が知る限り、*G. marsoneri*の最北の生息地は、Saltaの町のやや南から始まり、西方向にCampo Quijanoまで広がっている。(fig. 5-7) ここでは、*Echinopsis ancistrophora* Speg.や*E. albispinosa* K. Schum.と一緒に生育している。Tucumán州の北部では、*G. delaetii*と一緒に見られる産地がある。



Fig. 5: *G. marsoneri* VoS 830, Campo Quijano, 1520 m



Fig. 6: *G. marsoneri* VoS 1575 の生息地、村 (Villa) Sarmiento の南、1100 m



Fig. 7: *G. marsoneri* VoS 1575、この種は *G. saglionis* (Cels) Britton & Rose および *Echinopsis albispinosa* と一緒に、この場所で育つ。これまでのところ最東端の地域は、「Loro Hablador 州立公園」の Chaco 州にある。アルゼンチン人の Carlos Schmidutz は、そこで初めて植物を見つけることができた。(fig. 8)



Fig. 8: Chaco 州「Loro Hablador 州立公園」での *G. marsoneri* (写真:C. Schmidutz)

これまでに発見された*G. marsoneri*の最南端は、Catamarca州である。Catamarca州、Esquiú近郊、標高246 mのVoS 3161の産地では、*G. marsoneri*と*G. schickendantzii*と一緒に育つ。(fig. 9-11)



Fig. 9: 生息地 VoS 3099、Tucumán州、Choromoroの南東、標高714 m。ここでは、*G. marsoneri*と*G. delaetii*の最南端の代表が1つの場所で一緒に育つ。



Fig. 10: *G. delaetii*, Choromoro の南東の産地



Fig. 11: *G. marsoneri*, Choromoro の南東の産地



Fig. 12: *G. marsoneri*, 生息地 VoS 1391, Choya の東, Santiago del Estero 州、標高 403 m。植物は、ここで密集したチャコ植生で育つことがよくある。



Fig. 13: Choya の東の産地での *G. marsoneri* の成体植物。植物の体は直径約 15 cm に達する。



Fig. 14 - 15: *G. marsoneri* VoS 1392, Choya, Santiago del Estero 州、標高 386 m



Fig. 16: *G. marsoneri* VoS 3161 (写真: R. Sperling)

Fig. 17: *G. schickendantzii* VoS 3162



Fig. 18: 上: *G. marsoneri* VoS 830 の種子: *G. delaetii* LB 4591 の種子 (バー(bar) = 1 mm)

G. marsoneri の種子は、多かれ少なかれ (±) 球形で、ほとんどが基部に位置するハイラムマイクロピラー領域 (HMR) に向かってまっすぐである。*G. delaetii* の種子は±卵形で、基部に位置する HMR に向かって段階的に斜めに切り取られる。(fig. 18)



Fig. 19: 栽培中の *G. marsoneri* WR 159



Fig. 20: 栽培中の *G. marsoneri* P 230

説明文(Description)

胴体: 単幹、平坦な球形、側芽を出さない、直径 150 mm まで、表皮は緑色、灰色がかった緑色から青みがかった緑色、繊維状の根。(fig. 19 and 20) 陵: 20 個まで、わずかに丸みを帯びた顎状の隆起に融合する。縁刺: 5-7 本、最初は角色から褐色、後に灰色、先端は濃色、放射状に左右に伸び、突出さない、長さ 25mm まで、刺座は黄色っぽいフェルト状、後に灰色化する。



Fig. 21: *G. marsoneri* WR 159 の花



Fig. 22: *G. marsoneri* P 230 の花

花: 白色、漏斗形状から釣鐘形状、頭頂部の縁にある古い刺座から現れる、長さ 50mm まで、花糸は白っぽい、花柱と柱頭も白っぽい、葯は黄色がかかる、花粉は黄色、雄蕊の第2列は内側に曲がり、柱頭に隣接する、それと同様に、雄蕊の第1列は柱頭の下に配置される。(fig. 21 and 22) 果実: 多かれ少なかれ(±)楕円形、青みがががって赤みがかかる (bluish to reddish)、垂直に裂ける、果肉は赤い。



Fig. 23: *G. marsoneri* VoS 3159 の種子

種子: 多かれ少なかれ (±)球形で、基底に位置する HMR の方向はほとんどが直線で、まれに傾斜する。長さ 0.85~0.98 mm、M (30) (30 粒の平均値) = 0.92 mm、幅 0.78~0.98 mm、M (30) = 0.89 mm。種皮は淡褐色から褐色、艶消し状からわずかに光沢がある。種皮細胞は上部がくぼんでいることが多い。HMR は±幅の楕円形からときどき±八角形になる。種子グループ *Muscosemineum*(fig. 23)

謝辞(Acknowledgement)

有益な情報と議論をしてくれた Wolfgang Papsch に感謝します。分布図を作成してくれた Mario Wick と、写真を提供してくれた Carlos Schmidtutz と Reiner Sperling にも感謝します。

特に断りのない限り、すべての写真は著者によるものである。

文献(LITERATURE)

- Berger, F. (2015): Arealentwicklung der Untergattung *Muscosemineum* Schütz in den argentinischen Provinzen Salta und Tucumán. - *Gymnocalycium* 28(1):1146-1155.
- Blossfeld, R. (1937): Preisliste für Samen von Kakteen und anderen Sukkulente K 370: 17., J. Pakuscher, Berlin.
- Blossfeld, H. (1936): Eine Kakteen-Sammelreise in Südamerika I: - *Kakteenkunde* (5): 84-85, J. Neumann-Neudamm.
- Charles, G. (2009): *Gymnocalycium* in *Habitat and Culture*: 237-238. - Eigenverlag Charles, Stamford.
- Frič, A. V. (1929): Die letzte Kakteenjagd des Forschers A. V. Frič. - *Möllers Deutsche Gärtner-Zeitung* 44(15): 169-171.
- Itô, Y. (1957): *Explanatory Diagram of Austroechinocactinae*: 175, 293. - Japan Cactus Laboratory.
- Neduchal, J. (2002): Alberto Vojtěch Frič und seine Notokakteen: 4-8. - *Palmengarten der Stadt Frankfurt am Main*.

- Kreuzinger, K. (1935): Verzeichnis amerikanischer und anderer Sukkulente mit Revision der Systematik der Kakteen. - Eigenverlag Kreuzinger, Eger.
- Papsch, W. (2020): Anmerkungen zu zwei von A. V. Frič gesammelten *Gymnocalycium*-Taxa: *Gymnocalycium michoga* und *Gymnocalycium knebelii*. - *Schütziana* 11(3): 3-13.
- Till, H., Amerhauser, H. & Till, W. (2008): Neuordnung der Gattung *Gymnocalycium* Teil 2. - *Gymnocalycium* 21(Suppl.): 816 illus.
- Till, H., Amerhauser, H. (2012): Die *Gymnocalycien* des Gran Chaco und der Savannen aus Argentinien, Bolivien und Paraguay Teil XI. - *Gymnocalycium* 25(3): 1035-1046.